

# 禅と哲学のあいだ

(著者:形山睡峰)

## 1. 空こそが物を働かせている正体

空(くう)という概念

① 空っぽであれば何でも入られる

物の働きは空っぽのお陰であり、我々も空っぽであることで、満ち足りることができる

② 空っぽ = 中がつかまっていない

絶えず、空っぽの中に入っては出るを繰り返している

(それが自然の動きであり、人間も含め自然の摂理から外れては生きることはいできない)

cf) 趙州従諗

木魚のことを詩に詠い、

「音が出るのは、すべて中が空(くう)だからだ。何と空(くう)っぽであることの貴さよ！」(「趙州録」)

cf) 雲門文偃

「東山が水上を行く」(諸仏の姿を問われて)

cf) 色即是空

万物に固定された状態というのはなく、常に変化し続けている

## 2. 平等が現れるときは差別になる

(1) 平等に実体はない → 実体として現れるとき「差別」となってあらわれる

例) 「時」や「命」は万物に対し平等に与えられているが、人によって生き方や生きている時間も異なる

(2) 平等、差別は認識上のもの

本文より

「どんなに差別平等を上手に説いても、**みな認識上の産物**である。真実の者ならどちらにも関わらぬ真ん中を行く。しかし、そんな真ん中があるとってしまうと、**又真ん中が周辺に対する差別**になってしまう。」

(3) 平和を実現していくには

① 歴史からわかるように、人には争わずにはいられない「**比べ心**」があるから、常に人は争ってきた

② 平和を実現していくには**個々が「比べないで済む」ことを体験**し、理解していく必要がある

### 3. 死ぬこと

#### (1) 生死を働かせているものの存在

死ぬ時は突然であり、**己の意思を越えた所に**生死を働かせているものがある

本文より

「生を在らしめている、**その働き自体が、即座に死をも在らしめている**」

生きさせる力と死なせる力が己の意思を越えたところで同時に働いていることで、「**昨日の私**」は死に（**実体が消え**）空っぽになったところに「**今日の私**」が正しく生きられる

本文より

「生死がすき間なく**連続**している。その**働きようが止まらない間は、だれも今を**生きている」

関山慧玄（かんざん えげん：妙心寺のご開山）

「慧玄が這裏（しゃり）に生死（しょうじ）なし（私のところには生き死にはないよ）」

#### (2) 死ぬこととはどういうことか

死ぬ、というのは「私」や「己」が死ぬことではなく、**己の体に与えられた生きるための諸条件が尽きる**こと

本文より

「我々の肉体を生かすためには、三十七兆の細胞が**休みなくフル稼働**して...そんな精妙な働きのすべてが止まって、」

己が死ぬことで、**即座に新たな命を生む大本の力**になっている → 己一人が死んでいくわけではない

## 4. 我

### (1) 我

我は、思いのうだけで捉えた認識上の我

例)「我を忘れて」夢中になる→ 自他の思いが認識されていると面白くない

我は他があって始めて生じてくる

道元

「一方を証するときは一方はくらし。(一方を確認<差別>すれば、他方が暗黒<平等>になる。)」

本文より

「我々は思うたびに、**一如になっ**ている我を見たいと欲して止まないでいる。」

### (2) 己と平等・差別

「己」は身体に受けた情報を意の上で認識することで意識されるが、認識されなくても「己」はなくなる

身体で認識されるもの = 明るいもの = 差別

身体で認識されないもの = 暗いもの = 平等

### (3) 「私」の存在を支えているもの

私は私以外のもの(家族、友達、食べたもの、過去の私)の支えによって存在している

本文より

「外からの無量の情報に支えられて、始めて「私」なのである。」

## 5. 悟りと迷い

本文より

「**目前の煩悶に堪えられないから、その原因を壊したり減ぼしたりしようとする。また新たに作り直そうとする。…深刻な煩悶の原因を余所(よそ)にみないで、己の本性の問題と気づくならどうだろう。**」

趙州從諗

「**迷いを逃れて、どうするのかね**」

迷いも悟りも同じ一つの心。

迷わない心で見なければ、迷っていることに気づかない。

悟らない心で見なければ、悟っていることに気づかない。

## 6. 正受と不受

正受 = 正しく映す

不受 = 否定する

本文より

「我々が景色を見るのは見ることで己を否定している。...いま目の景色を受けることで、新たな己になり、**受ける以前の己が否定している。**」

「**我は他と全く無縁に、単独の個として存在してきた者ではない。**必ず他と関わりあうことで我になってきた。**我に他を取り込まねば、我がここに在ることが確認されないからである。**...つまり他をもって我を否定してゆかねば、**我を生きられない。**...我の場所に他を取り込んで、我を否定することで我が生を確かにしてきた。...この世の物はみな、**互いに他をもって自身を否定しあうことで、確かに存在してきたのである。**」

雲門文偃

「東山が水上を行く」

筆者はこの発言に対し、「水の流れに応じながらも正しく東山を映し（正受）、刹那にそれを否定しては（不受）、即座に新たな水鏡となって映している（正受）。**正受と不受と同時に動くことで、つねに新たな東山を映している。...**「行く」という語に、そんな**刹那も止まることなく絶対否定の働き**を象徴させた。」

<ポイント>

- ① 万事は常に同じ状態には止まらない。
- ② 常に現在の状態が否定され（= 不受）新しい状態がとりこまれる（= 正受）ことが繰り返される
- ③ この繰り返しが**万事を空っぽにする実体のない力が働いている**ことで成り立っている

## 7. 時の働き

（1）時とは何か

一分一秒という単位はあくまで人間界で通用するものであり、時は実体がなく、人間に認識できないものであるから、神や天、空と呼ばれてきた

万物は時にしたがって働いており、**時はすべてを空にする力の働きと同義語である**

（2）時の性質

- ① 時間はすべてのものに平等に及んでいる
- ② 時間には相（状態）がない
- ③ 時間の使い方によって差別が出る（= 「存在」が生まれる）

## 8. 不自由が充実を生む

### (1) 仏教徒の（に関わらず、一般の）激しい修行

激しい修行をした後、悟りの境地を得られると思うから修行を行うが、釈尊は**激しい修行をした後**、激しい修行に**虚無**を悟った

<ポイント>

**激しい修行そのものに意味があるのではなく、激しい修行の後、「迷い」「悟り」どちらも一つのところが生じていると気づく**

### (2) 自由

ここでは常に**同じ状態に止まらない**ことで、私たちは**自由・自在に(！)**生きている

例. 嬉しい、楽しい、悲しい、...と**同じ一つの心**が感じている

激しい修行によって「迷い」「悟り」の両極端を悟り上記のことに気づく（本では、「振り子」にたとえている）

**修行しつくした後**、修行するしないに関わらず、迷いなき心が元からそなわっていることを知る

**最初から完成形でない（不自由である）** からこそ、私たちは**ありがたさ**を感じることができる

### (3) 「臂は外に曲がらない」

・「碧巖録」第一則：達磨大師が武帝の「仏法の一番聖なるところは？」に対して「不識」と答えたことに、圓悟克勤(えんご こくごん)がつけた訳

・白隠が「毒語心経」の中で、「不生不滅不垢不浄不増不減」に対しつけた訳

臂は外に曲がらない、という**不自由**（これは勝手な人間の価値観によるもの！）があるからこそ、人間は**自由な創造力**を働かせ、自分の**よりよい状態**へと向かっていき達成できたときは充実感を得る

☆人間の価値観によらず、事実は存在しているので、**私ならばそこにどう向かっていくか**が肝心

☆**メルロポンティの思想と繋がる？**

本文より

「祖師方は**不自由を自由に変えるような解決**を持ったことはない。**不自由は不自由なまま**に使う道を悟ってきただけだからである。」

「**不自由を自在に使う自由性**を見なければならぬ。」

## 9. 理解するには体験を積む

### (1) 理解とは体験をすること

理解できないのは、自分ひとりの考えにとどまっているから

他の考え方をとりこみ、自分を否定することで理解できるようにすることが重要

☆上達している人の話を聞いても**その人の体験を通して語られる**ので理解できない

☆理解するには、上達している人の話を聞いて追体験するだけではなくて、自分自身で体験する必要がある

### (2) 知識と体験

知識 = 人のことば = 人の経験

体験 = 自分のことば

cf. 西田幾多郎「純粹経験」

過去からの無限の体験が私をつくっている

### (3) 言葉に頼りすぎるな

言葉は人間だけに通用する概念なので、言葉で全てをわかった気になってはいけない

本文より

「仏教は...言葉でいわれることが事実と思うから、言葉に捉われて迷ってしまうのだといってきた。」